

大学生の自閉スペクトラム症傾向と心理的症状の関連における社会的カモフラージュ行動、体験の回避、概念化された自己の媒介効果の検討

前田 航志 管 思清¹ 柳田 綾香 小林 莉奈 田口 潤一郎 内田 太郎¹
富田 望 熊野 宏昭 早稲田大学

The mediating effects of social camouflage behavior, experiential avoidance, and conceptualized self on the relationship between autistic traits and psychological symptoms in college students

Koshi MAEDA, Siqing GUAN¹, Ayaka YANAGIDA, Rina KOBAYASHI, Junichiro TAGUCHI, Taro UCHIDA¹, Nozomi TOMITA, and Hiroaki KUMANO (*Waseda University*)

Compensation, masking, and assimilation comprise social camouflaging behaviors commonly demonstrated by individuals with autistic spectrum disorders. They are associated with low self-esteem and poor mental health. However, few studies have examined the relationships among three factors of social camouflaging behaviors, mental health, and self-esteem. This study investigated the mediating effects of social camouflaging behaviors, experiential avoidance, and conceptualized self on the relationship between mental health deterioration and low self-esteem. A questionnaire survey was administered to 150 students at a private university in the capital area. The results demonstrated that compensation affects mental health and low self-esteem by mediating conceptualized self and experiential avoidance. Additionally, the results show that assimilation affects mental health and low self-esteem by mediating experiential avoidance. These results should be reexamined for future studies with clinical samples.

Key words: autism spectrum trends, social camouflaging behavior, experiential avoidance, self-esteem, conceptualized self.

Waseda Journal of Clinical Psychology
2022, Vol. 22, No. 1, pp. 59 - 65

社会的カモフラージュ行動とは、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) に関連する行動を、社会的状況で目立たなくするための戦略を用いることと定義されている (Lai et al., 2011)。この戦略には、人前で自閉特性 (Autistic traits) を含む行動を意図的に抑制することで、ASD の特徴を隠すことや、ASD 者が苦手とする社会的状況に対処するための行動レパートリーを拡大させることが含まれる (Hull et al., 2021)。社会的カモフラージュ行動は、一見合理的にも見えるが、精神的、身体的努力により、ネガティブな感情に対処する能力を低下させることや、自尊感情の低下が示されており、いずれもメンタルヘルスの悪化と関連すると報告されている (Hull et al., 2021)。メンタルヘルスとの関連においては、社会的カモフラージュ行動

を行う人ほど、抑うつ症状、社交不安症状、全般性不安症状が多くなることが示唆されている (Hull et al., 2021)。木村 (2021) は、一部の ASD 傾向者の背景に欠陥意識があり、自己否定と欠陥をカモフラージュして「普通」に擬態するあり方が認められたと示唆している。また、カモフラージュの結果として、「自分は偽物だ」などの自己否定的な認識が、最終的に低い自尊心につながっていることや (Hull et al., 2017)、他者との相互的な関係性の中で自己を否定的に理解していることが示唆されている (伊藤・大石・菊池, 2019)。これらの先行研究から、社会的カモフラージュ行動を行う ASD 者は、自己を否定的に認識することで自尊感情の低下を生じさせている可能性がある。しかしながら、ASD 者の自己に関する詳細な研究は少ない。

社会的カモフラージュ行動を測定する尺度として The Camouflaging Autistic Traits Questionnaire (CAT-Q; Hull et al., 2019) が開発されており、3 因子 25 項目から構

¹ 日本学術振興会特別研究員 (Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science)

成されている。CAT-Qは、社会的状況における困難を積極的に補うための戦略である「補償」、ASDの特徴を隠すことやASDではない特徴を他者に示すための戦略である「マスキング」、ASD者が苦手とする社会的状況で他者に合わせるための戦略である「同化」の3因子構造であることが報告されている(Hull et al., 2019)。これら3つの戦略には以下のようなリスクがあるとされている。Livingstone, Colvert, Bolton, & Happé (2019)は、補償を使用することでASDと診断されにくいことや、補償の使用は負担が大きいにも関わらず、しばしば成功しないことからwell-beingの低下や抑うつ、不安につながることを示唆している。また、自閉特性が高い人は社会的状況に同化しようとする傾向があり、その結果、帰属意識が阻害され、希死念慮・自殺行動が生じることが示唆されている(Cassidy et al., 2019)。

社会的カムフラージュ行動がメンタルヘルスを悪化させるプロセスには、第三世代のCBTの1つである、アクセプタンス&コミットメントセラピー(Acceptance & Commitment Therapy: ACT)における概念化された自己、および体験の回避といったプロセス要因が関与している可能性がある。概念化された自己とは、自分自身を定義し描写するために使用される言語的な内容と定義されている(武藤, 2011)。例えば、「私はうつ病だ」と自己を概念化することで、自身の思考や感情などの私的出来事と自己を同一視し、精神的苦痛を生み出すことが指摘されている(武藤, 2011)。また、概念化された自己にとらわれ、自身の思考と現実を混同した結果に対する対処法として、体験の回避が用いられる(Hayes, Luoma, Bond, Masuda, & Lillis, 2006)。体験の回避とは、特定の私的出来事(否定的に評価された身体感覚、感情、思考、記憶など)を避けたり、抑制したり、それらを引き起こす文脈の形態や頻度を変えようとする試みと定義されている(Hayes, Wilson, Gifford, Follette, & Strosahl, 1996)。体験の回避が生じることで精神的苦痛、不快感を増大させ、時に治療の妨げとなることが報告されている(Feldner, Zvolensky, Eifert, & Spira, 2003)。社会的カムフラージュ行動を測定するCAT-Qには「社交の場では、他人と話すのを避ける方法を探し出そうとする」という不安回避に関する項目も含まれているため、体験の回避と関連している可能性がある。

そこで、本研究では、ASD傾向者のメンタルヘルスの増悪プロセスを理解するため、社会的カムフラージュ行動の下位因子である補償、マスキング、同化が、概念化された自己と体験の回避を媒介し、メンタルヘルスに与える影響を検討する。また、社会的カムフラージュ行動の影響で自尊感情と自己否定感が生じるのかを明らかにする。

方法

対象者および倫理的配慮

首都圏の私立大学に通う学生158名を対象に調査を行った。回答に不備があった8名を除外し、有効回答150名(男性78名、女性66名、性別不詳6名、平均年齢21.21歳、 $SD=1.89$)を分析対象とした。

なお、本研究は、早稲田大学における「人を対象とする研究に関する倫理委員会」において、審査不要の判断がなされた上で実施した(承認番号:2021-126)。

手続き

本調査は2021年9月から同年11月にかけて実施した。複数の大学教員に協力を依頼し、講義終了後に質問紙調査を実施した。また、複数のサークルで、それぞれの責任者に許可を得た上で、Googleフォームを用いたWeb上のアンケート調査を実施した。

調査材料

- a) フェイスシート: 回答者の年齢と性別、学年を尋ねた。
- b) 自閉症スペクトラム指数10項目版(Autism-Spectrum Quotient10項目版: AQ-J-10; Kurita, Koyama, & Osada, 2005): ASD傾向を測定するための10項目4件法の尺度である。カットオフは7点以上とし、上回る場合にASDと診断される確率が高いことを示す。
- c) The Camouflaging Autistic Traits Questionnaire (CAT-Q; Hull et al., 2019): 社会的カムフラージュ行動を測定するための25項目7件法の尺度であり、高い信頼性と妥当性が示されている。「補償」、「マスキング」、「同化」の3つの下位因子から構成される。得点が高いほど、社会的カムフラージュ行動が高いことを示す。
- d) Three Senses of Selves Questionnaire (TSSQ; 柳原・川井・嶋・熊野, 2015): ACTの3つの自己の体験を測定するための尺度であり、高い信頼性と妥当性が示されている。本研究では、4つの下位因子のうち「概念化された自己」を測定するための、6項目4件法を使用した。得点が高いほど、概念化された自己に囚われていることを示す。
- e) 日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II (日本語版 AAQ-II; 嶋・柳原・川井・熊野, 2013): 体験の回避を測定するための7項目7件法の尺度であり、高い信頼性と妥当性が示されている。得点が高いほど、体験の回避をする傾向が高いことを示す。
- f) 日本語版 Rosenberg Self-Esteem Scale (日本語版 RSES; Mimura & Griffiths, 2007): 自尊感情を測定するための10項目4件法の尺度であり高い信頼性と妥当性が示されている。得点が高いほど、自尊感情が高いことを示す。

- g) 自己否定感尺度（宗像，2006）：自己に対する否定的なイメージの強さを測定するための10項目3件法の尺度であり，信頼性と妥当性は示されていない。得点が高いほど，自己否定感が高いことを示す。本研究では否定的な自己認識を自己否定感と位置づけ測定する。
- h) Patient Health Questionnaire-9日本語版（PHQ-9日本語版；村松，2014）：抑うつ症状を測定するための9項目4件法の尺度であり，高い信頼性と妥当性が示されている。得点が高いほど，抑うつ症状が強いことを示す。
- i) Generalized Anxiety Disorder-7日本語版（GAD-7日本語版；村松，2014）：全般性不安症状を測定するための7項目4件法の尺度であり，高い信頼性と妥当性が示されている。得点が高いほど，全般性不安症状が強いことを示す。

分析方法

(1) 相関分析

社会的カモフラージュ行動の各下位尺度とその他の変数との関連を検討するために，Pearsonの積率相関分析を実施した。解析はSPSS version 26 (IBM, New York, USA)を使用した。

(2) 共分散構造分析

社会的カモフラージュ行動の下位尺度である，補償，マスキング，同化がそれぞれ概念化された自己と体験の回避を完全媒介し，自尊感情と自己否定感そして抑うつ症状と全般性不安症状に及ぼす一連のプロセスを検討するために，共分散構造分析を実施した。モデルの適合度の指標として，GFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted GFI), CFI (Comparative Fit Index),

RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation), AIC (Akaike's Information Criterion)を使用した。また，本研究では，同じ変数から構成される複数のモデルのうち，AICが最も低いモデルを採択した。

仮説

(1) 相関分析

- a) AQ-J-10とCAT-Qの下位尺度である補償，マスキング，同化との間にそれぞれ有意な中程度の正の相関が示される。
- b) CAT-Qの下位尺度である補償，マスキング，同化とTSSQとの間にそれぞれ有意な中程度の正の相関が示される。
- c) CAT-Qの下位尺度である補償，マスキング，同化とAAQ-IIとの間にそれぞれ有意な中程度の正の相関が示される。
- d) TSSQとRSESとの間に有意な中程度の負の相関が示され，TSSQと自己否定感との間に有意な中程度の正の相関が示される。
- e) AAQ-IIとRSESとの間に有意な中程度の負の相関が示され，AAQ-IIと自己否定感との間に有意な中程度の正の相関が示される。
- f) RSESとPHQ-9, GAD-7との間に有意な中程度の負の相関が示される。
- g) 自己否定感尺度とPHQ-9, GAD-7との間に有意な中程度の正の相関が示される。

(2) 共分散構造分析

上記の先行研究をもとに仮説モデルを構築した。Figure 1に仮説モデル図を示す。

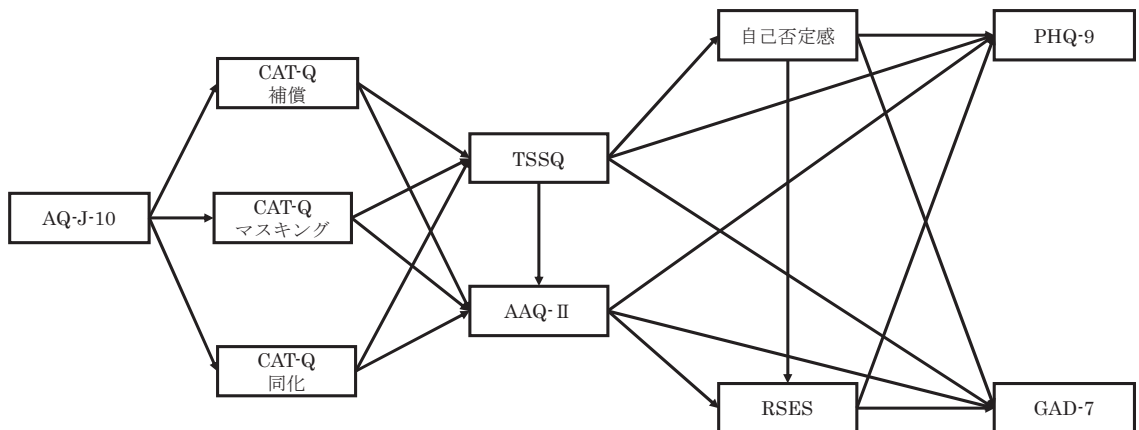


Figure 1 仮説モデル。

Note. AQ-J-10: Autism-Spectrum Quotient10 項目版；TSSQ: Three Senses of Selves Questionnaire；自己否定感：自己否定感尺度；AAQ-II: Acceptance and Action Questionnaire-II；RSES: Rosenberg Self-Esteem Scale；CAT-Q: The Camouflaging Autistic Traits Questionnaire；PHQ-9: Patient Health Questionnaire-9；GAD-7: Generalized Anxiety Disorder-7.

結 果

本研究の対象者で、AQ-J-10のカットオフを超える学生は11人と非常に少なかった。

(1) 相関分析

各尺度の平均値と標準偏差、各尺度間の相関を Table 1 に示した。

まず、AQ-J-10とCAT-Qの下位尺度であるマスキング、同化の間には弱い正の相関が示されたが、補償との間には相関がなく、他の変数との間でも、自己否定感との間に弱い正の相関が示されたのみであった。

補償、マスキング、同化とTSSQとの間に弱い正の相関が示された ($r = .378, p < .01; r = .341, p < .01; r = .346, p < .01$)。また、CAT-Qの下位尺度である補償とAAQ-IIとの間に有意な弱い正の相関が示され ($r = .355, p < .01$)、マスキングとの間に有意なごく弱い正の相関が示され ($p = .177, p < .05$)、同化との間に有意な中程度の正の相関が示された ($r = .536, p < .01$)。

TSSQとRSESとの間には、有意な弱い負の相関が示され、TSSQと自己否定感尺度との間に有意な弱い正の相関が示された ($r = -.263, p < .01; r = .331, p < .01$)。また、AAQ-IIとRSESとの間に有意な中程度の負の相関が示され、AAQ-IIと自己否定感尺度との間に有意な中程度の正の相関が示された ($r = -.640, p < .01; r = .546, p < .01$)。

RSESとPHQ-9、およびGAD-7との間に有意な中程度の負の相関が示された ($r = -.547, p < .01; r = -.570, p < .01$)。また、自己否定感とPHQ-9、およびGAD-7との間に有意な中程度の正の相関が示された ($r = .646, p$

$< .01; r = .614, p < .01$)。

(2) 共分散構造分析

共分散構造分析により採択したモデル図を Figure 2 に示した。PHQ-9 (平均値: 15.75, 標準偏差: 5.31)、およびGAD-7 (平均値: 12.37, 標準偏差: 5.22)を観測変数とする潜在変数を改めて「メンタルヘルス」とした。有意なパスは実線の矢印で示した。モデルの適合度を算出した結果、概ね許容可能な値が得られた (GFI = .921, AGFI = .851, CFI = .945, RMSEA = .091, AIC = 116.927)。

AQ-J-10はCAT-Qの同化のみに、弱い正の影響を及ぼすことが示された。

CAT-Qの下位尺度であるマスキングは、補償に中程度の正の影響を及ぼすことが示された ($\beta = .499, p < .001$)。また、補償は、概念化された自己に弱い正の影響を及ぼすことが示され、同化は、体験の回避に中程度の正の影響を及ぼすことが示された ($\beta = .292, p < .001; \beta = .418, p < .001$)。

概念化された自己は、体験の回避、およびメンタルヘルスに弱い正の影響を及ぼすことが示された ($\beta = .339, p < .001; \beta = .254, p < .001$)。また、体験の回避は、自尊感情に弱い負の影響を及ぼし、メンタルヘルスに弱い正の影響を及ぼすことが示された ($\beta = -.318, p < .001; \beta = .287, p < .001$)。加えて、体験の回避は、自己否定感に中程度の正の影響を及ぼすことが示された ($\beta = .546, p < .001$)。

考 察

本研究の目的は、ASD傾向者の社会的カモフラ

Table 1
記述統計量および Pearson の積率相関分析の結果 (N = 150)

	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 AQ-J-10	2.97	2.11	—	-.014	-.214**	.272**	.061	.133	.207*	-.139	.062	.065
2 CAT-Q 補償	33.85	9.35		—	.499**	.358**	.378**	.355**	.215**	-.200*	.351**	.326**
3 CAT-Q マスキング	38.25	6.81			—	.291**	.341**	.177*	.113	-.130	.271**	.235**
4 CAT-Q 同化	34.33	7.12				—	.346**	.536**	.379**	-.500**	.438**	.449**
5 TSSQ	28.37	5.51					—	.484**	.331**	-.263**	.505**	.462**
6 AAQ-II	26.13	9.28						—	.546**	-.640**	.519**	.646**
7 自己否定感	4.72	4.61							—	-.666**	.646**	.614**
8 RSES	25.73	6.36								—	-.547**	-.570**
9 PHQ-9	15.75	5.34									—	.775**
10 GAD-7	12.37	5.25										—

Note. AQ-J-10: Autism-Spectrum Quotient10 項目版; TSSQ: Three Senses of Selves Questionnaire; 自己否定感; 自己否定感尺度; AAQ-II: Acceptance and Action Questionnaire-II; RSES: Rosenberg Self-Esteem Scale; CAT-Q: The Camouflaging Autistic Traits Questionnaire; PHQ-9: Patient Health Questionnaire-9; GAD-7: Generalized Anxiety Disorder-7. ** $p < .01$, * $p < .05$.

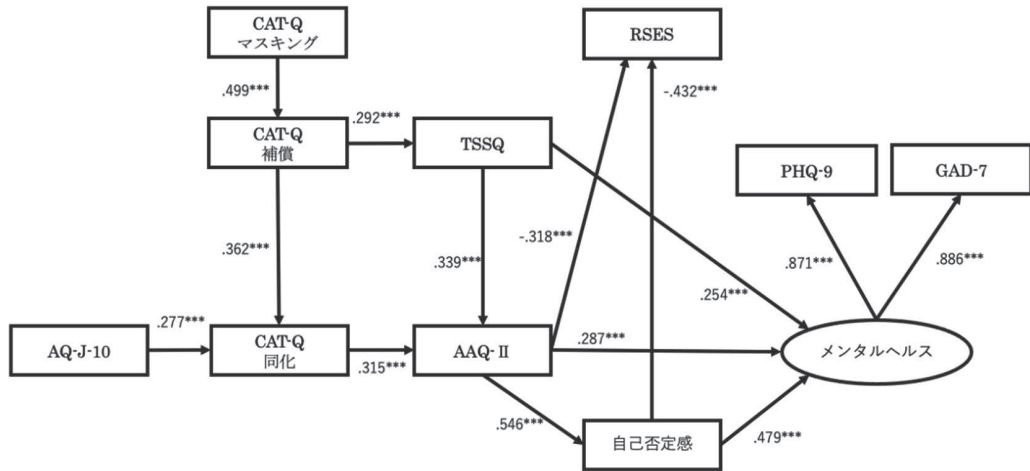


Figure 2 採用されたモデル。

Note. AQ-J-10: Autism-Spectrum Quotient10 項目版; TSSQ: Three Senses of Selves Questionnaire; 自己否定感：自己否定感尺度; AAQ-II: Acceptance and Action Questionnaire- II; RSES: Rosenberg Self-Esteem Scale; CAT-Q: The Camouflaging Autistic Traits Questionnaire; PHQ-9: Patient Health Questionnaire-9; GAD-7: Generalized Anxiety Disorder-7. GFI = .921; AGFI = .851; CFI = .945; RMSEA = .0091; AIC = 116.927. $N = 150$. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

ジュ行動を構成する補償、マスキング、同化がそれぞれ概念化された自己と体験の回避を媒介し、メンタルヘルスに与える影響を検討すること、また自尊感情と自己否定感の位置付けを明らかにすることであった。しかし、本研究の対象者には AQ-J-10 のカットオフを超える学生はほとんど含まれておらず、また AQ-J-10 と有意な相関を示した変数も、マスキング、同化、自己否定感の3つのみであり、仮説 1-a もごく一部のみが支持されるにとどまった。したがって、本研究の結果は、定型発達者において、ASD 者と共通する社会的カモフラージュ行動が、メンタルヘルスの悪化にどのような影響を及ぼすかを明らかにしたものとする必要がある。

社会的カモフラージュ行動と概念化された自己、および体験の回避の関連

Pearson の積率相関分析の結果、CAT-Q の下位尺度である補償、マスキング、同化と TSSQ との間にそれぞれ有意な弱い正の相関が示された。このことから仮説 1-b は支持された。また、AAQ-II は同化との間に有意な中程度の正の相関が示され、補償との間に弱い正の相関が示され、マスキングとの間に有意なごく弱い正の相関が示された。したがって、仮説 1-c は一部支持された。

さらに、TSSQ と AAQ-II との間に中程度の正の相関が示された。同化に不安回避の項目が含まれていることや (Hull et al., 2019)、概念化された自己に囚われた際の対処法として体験の回避が用いられる (Hayes et al., 2006) ことから、概念化された自己と体験の回避は

社会的カモフラージュ行動のプロセスに関連がある可能性がある。さらに、補償、マスキングと PHQ-9, GAD-7 との間にそれぞれ弱い正の相関が示され、同化と PHQ-9, GAD-7 との間に中程度の正の相関が示された。このことから、社会的カモフラージュ行動によって、概念化された自己への執着、および不快な私的出来事に対して体験の回避を行うことで、抑うつ症状・全般的な不安症状が生起している可能性がある。

概念化された自己、体験の回避と自尊感情、および自己否定感の関連

TSSQ と RSES との間に有意な弱い負の相関が示され、TSSQ と自己否定感との間に有意な弱い正の相関が示された。したがって、仮説 1-d は一部支持された。また、AAQ-II と RSES との間には有意な中程度の負の相関が示され、AAQ-II と自己否定感との間に有意な中程度の正の相関が示された。したがって、仮説 1-e は概ね支持された。これらの結果から、概念化された自己のとりわれ、および体験の回避を行うことは、自尊感情の低下や自己否定感の増幅と関連する可能性がある。

また、補償と RSES との間にごく弱い負の相関が示され、補償と自己否定感尺度との間に弱い正の相関が示された。洗練された補償を使用することで社会的状況を楽に感じられるという知見 (Livingstone et al., 2019) より、補償は苦手とする社交場面の困難さを手助けする有用な戦略となる可能性がある。一方で、補償を用いる自己を否定的に捉えていることから、自尊感情との間にも弱い負の相関が示されたと考えられる。

メンタルヘルスと自尊感情、および自己否定感の関連

RSESとPHQ-9、およびGAD-7との間に有意な中程度の負の相関が示された。したがって、仮説1-fは概ね支持された。また、自己否定感とPHQ-9、およびGAD-7との間に有意な中程度の正の相関が示された。したがって、仮説1-gは概ね支持された。自尊感情は、自分自身に対する肯定的な感情、自分を価値ある存在として捉える感覚と定義され(伊藤, 2002)、先行研究においてもうつや不安と中程度の有意な相関を示したことが報告されている(伊藤・小玉, 2005)。また、自己否定感についても、否定的自己の注目が省察と反芻、抑うつに及ぼす影響を検討した先行研究において、否定的自己の注目が抑うつを高めることが示唆されている(熊田・及川, 2015)。加えて、不安と否定的な自己認知バイアスとの関連を検討した研究では、高不安群において否定的自己認知バイアスが高いことが示唆されている(川上・松田, 2015)。したがって、本研究でも上記の先行研究と一致する結果が示されたといえる。

社会的カモフラージュ行動のプロセス要因の検討

共分散構造分析の結果、補償は概念化された自己を媒介することで、体験の回避、およびメンタルヘルスに影響を及ぼしていること、さらには同化を強めていることが示唆された。ASD者は、補償として、他人に不快感を抱かせないための厳格なルールを設け、他人の期待に合わせようと振る舞うことがある(Hull et al., 2017)。そのように、厳密なルールを設け、他人が期待する自己像に囚われることで概念化された自己が強められ、メンタルヘルスの悪化や体験の回避に至るプロセスがあると考察できる。また、同化はACTにおける問題行動の中核となる体験の回避に中程度の影響を示すとともに、AQ-J-10からも弱い影響を受けていることが示された。同化は、ASD者が苦手とする社会的状況で他者に合わせるための戦略である(Hull et al., 2019)。例えば、同化として、定型発達者のふりをし、無理な交流を行うことが挙げられる(Hull et al., 2019)。このように苦手とする社会的状況に無理に適合しようとすることで、不快な私的出来事に対する体験の回避が生じやすくなると考えられる。したがって、同化によって、体験の回避が生じ、メンタルヘルスの悪化に至るプロセスがあると考えられる。

また、社会的カモフラージュ行動は、体験の回避を媒介することで自尊感情の低下に影響を及ぼすことが示され、自尊感情は、メンタルヘルスと同じく従属変数となり、症状に近い位置づけになることが示された。一方で、体験の回避は、自己否定感を媒介し、自尊感情およびメンタルヘルスに影響を及ぼすことが示された。この結果は、社会的カモフラージュ行動によって、自己否定感が高まり、自尊感情が低下するという臨床的知見(Hull et al., 2017)と一貫する結果である。さら

に体験の回避は、自尊感情の低下、自己否定感の増加、およびメンタルヘルス悪化に影響を及ぼすことが示された。このことから、対人場面において、社会的カモフラージュ行動によって体験の回避が生じ、短期的には苦手とする出来事に耐えることができたとしても、長期的には自己否定感が増加し、メンタルヘルスの悪化や自尊感情の低下に繋がると考えられる。

限界点

本研究では、AQ-J-10のカットオフを超える学生が非常に少なかったことから、定型発達者における検討にとどまった。したがって、今後はASD者の社会的カモフラージュ行動からメンタルヘルスに至るプロセスを明らかにするために、臨床群を対象とした検討を行い、今回の結果と比較する必要がある。加えて本研究では横断的な質問紙調査を実施したため、因果関係に関して推測することに留まった。今後は、縦断的な質問紙調査の実施や、因果関係を明らかにする実験研究が必要である。

引用文献

- Cassidy, S. A., Gould, K., Townsend, E., Pelton, M., Robertson, A. E., & Rodgers, J. (2019). Is camouflaging autistic traits associated with suicidal thoughts and behaviours? Expanding the interpersonal psychological theory of suicide in an undergraduate student sample. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 50, 3638-3648.
- Feldner, M. T., Zvolensky, M. J., Eifert, G. H., & Spira, A. P. (2003). Emotional avoidance: An experimental test of individual differences and response suppression using biological challenge. *Behavior Research and Therapy*, 41, 403-411.
- Hayes, S. C., Luoma, J. B., Bond, F. W., Masuda, A., & Lillis, J. (2006). Acceptance and commitment therapy: Model, processes and outcome. *Behaviour Research and Therapy*, 44, 1-25.
- Hayes, S. C., Wilson, K. G., Gifford, E. V., Follette, V. M., & Strosahl, K. D. (1996). Experimental avoidance and behavioral disorders: A functional dimensional approach to diagnosis and treatment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 1152-1168.
- Hull, L., Levy, L., Lai, M. C., Petrides, K. V., Baron-Cohen, S., Allison, C., ...Mandy, W. (2021). Is social camouflaging associated with anxiety and depression in autistic adults? *Molecular Autism*, 12, 1-13.
- Hull, L., Mandy, W., Lai, M. C., Baron-Cohen, S., Allison, C., Smith, P., & Petrides, K. V. (2019). Development and validation of the camouflaging autistic traits questionnaire (CAT-Q). *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 47, 2519-2534.
- Hull, L., Petrides, K. V., Allison, C., Smith, P., Baron-Cohen, S., Lai, M. C., & Mandy, W. (2017). "Putting

- on my best normal”: Social camouflaging in adults with autism spectrum conditions. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 47, 2519–2534.
- 伊藤 佳寿子・大石 幸二・菊池 春樹 (2019). 自己を保ちながら他者と関わるスキルと自閉症スペクトラム指数との関係——自他境界の観点からの検討——東京成徳大学臨床心理学研究, 19, 93–106.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74–85.
- 伊藤 忠弘 (2002). 自尊感情と自己評価 船津 衛・安藤 清志(編) 自我・自己の社会心理学 (pp.96–111) 北樹出版
- 川上 彩子・松田 英子 (2015). 抑うつおよび不安傾向と自己認知バイアスの関連性の検討 江戸川大学紀要, 25, 167–170.
- 木村 大樹 (2021). 自閉スペクトラム症の対人不安に関する心理臨床学的研究 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士論文(未公刊)
- 熊田 麻里・及川 恵 (2015). 肯定的・否定的自己への注目が省察と反芻、抑うつに及ぼす影響 東京学芸大学紀要, 66, 289–297.
- Kurita, H., Koyama, T., & Osada, H. (2005). Autism-Spectrum Quotient-Japanese Version and its short for screening normally intelligent persons with pervasive developmental disorders. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 59, 490–496.
- Lai, M. C., Lombardo, M. V., Pasco, G., Ruigrok, A. N. V., Wheelwright, S. J., Sadek, S. A., ...Baron-Cohen, S. (2011). A behavioral comparison of male and female adults with high functioning autism spectrum conditions. *PLoS ONE*, 6(6), 1–10.
- Livingston L. A., Colvert, E., Bolton, P., & Happe', F. (2019). Good social skills despite poor theory of mind: exploring compensation in autism spectrum disorder. *Journal of Child Psychol Psychiatry, and Allied Disciplines*, 60, 102–110.
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589–594.
- 宗像 恒次 (2006). SAT療法 金子書房
- 武藤 崇 (2011). ACTハンドブック——臨床行動分析によるマインドフルなアプローチ—— 星和書店
- 村松 公美子 (2014). Patient Health Questionnaire (PHQ-9, PHQ-15) 日本語版および Generalized Anxiety Disorder-7 日本語版—— up to date —— 臨床心理学研究, 7, 35–39.
- 嶋 大樹・柳原 菜美佳・川井 智理・熊野 宏昭 (2013). 日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II 7 項目版の検討 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 271.
- 柳原 菜美佳・嶋 大樹・齋藤 順一・川井 智理・熊野 宏昭 (2015). 三つの自己の体験尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 行動療法研究, 41, 225–238.

